

「今頃に？」船越

この写真の風景になんとか見覚えのある方はおられませんか？写っている人物がイマイチなのや色彩の違い等々でわかりにくいですが、昨年ヒットした映画「君の名は。」のラストで主人公の二人がお互いに「君の名前は？」と声をかけた四ツ谷駅そばの須賀神社のあの階段です。先月次男に話があり、東京に行った際に「聖地（ロケ地）近いで」と言われ、興味本位で立ち寄ってみたのですが、さすがブームとなった聖地巡礼の地の一つとあって、今でも写真を撮るのに順番待ちの列ができていました（ちなみに右側の人物は長女です）。このあと、久しぶりに東京タワーに昇ったのですが、こちらは大変な人混みでした。日本人として、たまには自国の首都の熱気を体感しないとイケないな、と妙な焦りを感じさせられた東京でした。



今さら聞けない 経済用語

今月の教えてキーワード：【CASE】

自動車産業の今後の動向を表すキーワードである Connected（インターネット接続）、Autonomous（自動運転）、Shared&Services（カーシェアリング）、Electric（電動）の頭文字をとった造語。2016年のパリモーターショーでダイムラー社のディエター・チェツェ氏が発表した。環境問題や安全性向上、人口減少社会への対応も求められる中、世界の自動車メーカーや周辺機器企業は100年に一度の変革期にあるといわれている。

偉大なる日本の100人に学ぶ 人の心を魅了する生き方。

【質実剛健な人情家「乃木希典（まれすけ）」】

日露戦争での活躍で知られる乃木希典は1849年、長州藩の支藩である長府藩の家臣の三男として生まれました。幼い頃に暮らした長府藩上屋敷



は『忠臣蔵』で知られる赤穂浪士の10人が切腹するまでの間、預けられたという縁があり、幼少期から赤穂浪士の逸話を通じて父から武士道をたたきこまれたといえます。17歳で長州藩の藩校・明倫館に学び、同じ年に第二次長州征伐で初陣を経験、

エリート軍人としての道を歩むのでした。西南戦争では自らも深い傷を負いながら任務をまっとうし38歳でドイツに留学。45歳で日清戦争で大活躍します。日露戦争が勃発したのは希典が55歳の頃で、2人の息子たちはこの時期に戦死しています。長く苦しい戦いの末に日露戦争が終戦を迎えたとき、敵将であるステッセル将軍に最大限の礼を尽くした希典の振る舞いは、世界中から絶賛されて各国から勲章が与えられました。そんな希典は、上官としてとにかく部下を大切にしたいそうです。どれだけ出世しても「それは部下の尽力のおかげ」と常に感謝の気持ちを忘れず、部下の失敗は責めない。戦場でごちそうが出てても部下も同じものを食べているかを確認し、違っていたら決して口にしないそうです。戦場で腕を失った兵士のために自ら義手を開発して自費で進呈しました。その後、兵士から令状が届くと涙を流して喜んだそうです。

今を生きる

先人の言葉

人間は地位が高く
なるほど、足元が
滑りやすくなる

帝政期ローマの政治家であるタキトゥスの言葉。目的を達成したとき、ホッと一安心したときこそ要注意。油断は禁物だ。いかなる場合でも気を引き締めていよう。

